

こちらに来て、そろそろ新聞を取ろうかと思つていますが、今のところ何が良いのかと探しているところです。東京にいる時は日経新聞を取つていましたが、折角仙台に来たのだから、地方新聞が良いかなとも思つています。今はネットがあるため、新聞がなくてもそれなりにちゃんとニュースは終えるのですが、やはり毎朝新聞を読むのも必要かなと感じています。

ただ、今新聞を読んで政治のニュースを見ると腹が立つことばかりになりそうでもあります。世界に目を向けると戦争が未だに続いていることに対する悲しみもそうですが、国内に目を向けましても汚職や裏金騒動などがありますし、そう言つた恒常的な不正を全く報じようとしなかったメディアに対する不信もあります。精神にはあまり良くありませんが、それと向き合うことも重要だとも思つています。むしろ怒りというものをしっかりと持つことも重要でしょう。

キリスト者は落ち着いていて、穏やかというイメージをもたれがちですが、実際にその中にいると、むしろ一般的な人たちよりも心の中に激しいものを持つた人が多いものです。改めて考えてみると、どんな人にとつても「これは許せないもの」というものを持つています。誰しも人にはこの話題になつてしまふと熱くなると言うか、どうしても腹が立つてしまうものが存在するものです。

それをプライドと言います。

どんな人にも必ずプライドがあり、それを守ることで人の個性を作ります。

プライドのハードルが低かったり、多方面にプライドを持つために、何でも噛みつく人という人もいます。そう言う人は人に嫌われがちです。意外に政治家にそう言う人が多いのがちよつと何ですが、何でもかんでも怒りまくる人というのは端から見ると、人間

の小ささが強調されるだけですし、近づきたくないと思われただけなのですが。一方では自分のプライドを一切見せないと、こんどは得体の知れない人に思われてしまうという所もあつたりします。

だからこそ、私達は自分自身のプライドがどこにあるのかを把握していくことが重要になります。どこまでは許せるし、どこからが許せないのか。自分の中でその基準を作っておくと、むやみやたらと怒ることはなくなりません。自分自身にとってのプライドがどこにあるのかを知っていくことと、そのプライドと上手く付き合っていくことが、いわゆる大人になると言うことです。

私達は多方面に様々なプライドを持ちますが、その中で絶対に守らねばならないものがあります。私たちにとつて、他のすべてを失つても、これだけは絶対に譲れないというものです。一生をかけて守るべきものを持つ。そういうものを一つ持てる人は幸いなものかもしれませんね。プライドをたくさん持つ必要はありませんが、本当に大切なプライドを持つているだけでも人生には大きな目標が生じます。

信仰者になるということとは、自分の中にプライドを得た人と言い換えられます。私たちには捨てられない信仰があります。心が神様と結びついている人は、神様と共にあると言うプライドがあります。それがプライドです。私達信仰者にとつて、重要なものなのです。一般の方々とお話しをするとき折を感じることですが、時に信仰というのを弱さと感じる人がいて、そう言う人は信仰者を馬鹿にするような言い方をすることがあります。そう言う人と会話をしていると確かに腹が立ちます。しかし実はそれ自体は、相手が理解してないだけなので害意はありませんし、そう言うものだとして心に納得させることは出来ません。しかし本当に許せないものもあります。それは神様と結びついていて私の魂を神様から引き離そうとするものです。もし他人が、あるいは国がそれを無理矢理行おうとしたならば、その時こそ本当に怒りを持って行動しなければなりません。それが本当のプライドというものです。

信仰の学びというのは、それを知っていくということになるでしょうね。信仰上、これだけは必ず守らねばならない者というものを形作っていくことが私達の成長であるとも言えます。

本日の聖書箇所はイエス様が子達に、本物のプライドについて語られている箇所です。ここは迫害の予告です。イエス様を信じる人たちがこれから味わうであろう苦労や痛みといったものをイエス様自ら語ります。

一九節で「あなたがたが世に属していたなら、世はあなたがたを身内として愛したはずである。だが、あなたがたは世に属していない。わたしがあなたがたを世から選び出した。だから、世はあなたがたを憎むのである。」とお話しになっていますが、これは端的に信仰とは何かを示した箇所です。

イエス様を信じると言うことは、時に世界を敵に回すことになることになるとイエス様はお話しします。それは私を取り巻く世界がイエス様を否定するならば、それに対して戦わねばならないという事も聖書は語っているのです。

世界がイエス様を否定するとき、弟子達はどうするべきなのか。

その時、世界に対しても戦いを挑まねばならない。イエス様はそう語ります。世界がキリスト教を認めるならば、そこで信仰を全うすることができるよう。しかし逆に世界がキリスト教を認めないならば、その時信仰者は世界を相手に自分の信仰の正しさを主張する必要があるのです。それこそが信仰者としてのプライドなのです。

この世界にあって、信仰とは基本的に穏やかなものといえます。世界の中で賢く、穏やかに過ごします。しかし一旦信仰を脅かすものがあつたとき、自らのプライドを賭けて抵抗すること。その覚悟があるのか、その事をイエス様は問います。

自分自身の信仰について、それを引き離そうとするものが時として現れます。その際、私達はどのように対処しますか。自らのプライドを守るか、それとも捨てるか。イエス様の問いは、今の私達に対する問いでもあるのです。私達も自らにそれを問いかけ、その強

さを持てるよう、私自身を含めて自分自身の信仰を強めていきましよう。

勿論それは個人の信仰に留まりません。教会も同じです。信仰を迫害するものあらば、教会は抵抗します。教会のプライドとは、イエス様を伝える場所であると言うことですから、イエス様から切り離されたら、それはもう教会とは言えないものになりますから。すべての教会には苦難の歴史が刻みつけられています。時としてそれは教会のプライドを賭けた戦いの歴史です。そのそれは教会員の中に刻みつけられているものでしょう。しかし、その戦いの中に、確かに神様を信じる信仰の力があるからこそ、教会は建ち上がり続けるものです。

ここで語られたことはイエス様の死の後でイエス様を信じた者達が味わったものです。そしてその苦難を経て教会は建ち上がりました。

幸い日本は信仰の自由というものがあって、信仰のために迫害されることはありませんが、時代の変化でそれが脅かされることもあるのです。その時、私たちはいったいどう対処するのか。その事を考えてみることも時に必要です。

イエス様は弟子達を通して、私たちにも覚悟を決めよと言っています。イエス様に従うと言うことは自分自身の中に覚悟を持ち、それを最優先にすべきと考えて歩んでいくことです。軽い気持ちでは無く、そこに立たされたときのことを私たちは思う必要があります。最後に二六節でイエス様は弁護者について語ります。弁護者とは、神様から私達に使わされた聖霊のことを言いますが、それは神様から与えられた力です。私達の信仰を貫くのは、その力を信じ抜くことです。私達の中に確かに存在する聖霊という存在を、私達は自分自身のプライドとして守り、信じていくことが重要なのです。